
アンパンマン ～ 真実の友 ～

滾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンパンマン 〜 真実の友 〜

【Nコード】

N0646B

【作者名】

滾

【あらすじ】

アンパンマンのOPのままに書き綴られた真実。なんてものじゃないです。アンパンマンファンの方、及びその他キャラクターファンの方はここからお引き換えしてください。

前 何為（前書き）

アンパンマンのOP（だったけ？）を僕なりの解釈で変形させました。

前 何為

ある日僕は生まれた。

母が居たわけじゃなかった。

父が居たわけでもなかった。

生まれた時から、僕は“アンパン”だった。

僕を作ったのは“ジャムおじさん”という恰幅の良いおじさんだった。

僕は生まれた時から凄い力を持っていた。その力を見て、ジャムおじさんは言った。

「君はその力を皆の為に使うんだ。その為に生まれてきたのさ」僕は、言われるがままだった。

この世界には色々な生物が生息していた。

カバだったり、ウサギだったり、井だったり、骸骨だったり、パンだったり……。

ジャムおじさんとバタ子さんのように“人間”としてこの世界に居る事は珍しい事だった。

この世界は基本的に平和だった。

皆喉かに暮らして、何の変哲も無い平和を感じていられた。

ただ、逆にそんな平和を乱す奴も居た。

ソイツの名前は“バイキンマン”と言って、カビを兵隊に従えているような奴だった。

彼が皆を傷つけようとするせいで、僕は彼と戦わなければならなかった。

戦うんだ。

そのために、僕は生まれてきたのだから――

僕は何度もバイキンマンと戦った。

彼はメカニックを駆使して何度も僕に勝負を挑んできた。

僕は何度も傷ついた。

何度も、

何度も。

僕は顔に何らかの傷害が起きると、それだけ運動能力に支障が出る体質だった。

何度も、何度も倒された。

何度も、深い眠りにつく事を受け入れた。

それでも、毎回それは阻まれた。

バタ子さんが僕に向けて、新しい顔を投げつけるからだった。そうすると僕の頭は入れ替わり、勝手に体に力が戻ってきた。

「お前はまだ死ぬ事を許されない」

そう言われているかのように、毎回感じた。

死ぬまで戦い続けるのだ、と。

そして、死ぬ事はゆるされないのだ、と。

そうだと、その度に僕は自分に言い聞かせた。

“嬉しい”のだ、と。

僕は戦う。

その為に生まれてきたのだから、と。

だから、と、僕は思う。

たとえ胸の傷が毎回痛もうとも、僕は戦わなければいけないのだ。

ただ、時々思う。

何のために生まれて、何をして生きるのか？

ずっと、このままなのか——？

と。

“自分がやらなければ”、そんな事は解っている。

きっとバイキンマンに世界は征服されてしまっだろう。

「君がやるんだ」

声がする。

「あなたしか居ない」

そう、言われているから。

「君は行くんだ」

と、心の中で声がする。

「微笑んで」と。

そうだ。と、自分に何度も言い聞かせる。

嬉しいんだ、と。

戦う事が僕にとっての生き甲斐。

僕にとっての生きる意味であり、価値。

戦わなければ、僕はここに居る必要がないんだ。

「君は優しいから」

と、誰かが言った。

だから、僕は戦うのか？

優しいから？

作られたからだろう？

そうだ。

僕は“生まれた”んじゃない。“作られた”んだ。
だから、戦う。

戦うためにここに存在するのだから。

「行け。みんなの夢を、お前が守るのだ」

今日もその言葉が僕を突き動かす。

僕が守る。

僕は、戦う。

前 何為（後書き）

二話で終わります。

他の連載のデータが吹っ飛んでしまったので、その& a m p ; # 3 2 3 6 3 ・ぎです。

& a m p ; # 3 2 3 6 3 ・ぎですが、楽しんで頂ければ幸いです。

後 其為

「何が君の幸せ？」

と誰かが聞いた。

誰でもない……。誰か……。

自分だろうか……。

「何をして喜ぶ？」と。

今まで、考えたことも無かった。

喜び。

ただ、皆を助けることが出来ればいいんだと。

その為に作られたのだから。と。

だけど、本当を言えば、そんなのは嫌だった。

だけど、そんな僕の思いを察してか、ジャムおじさんは毎回言った。

「忘れるな」と。

「夢を忘れるな」と。
やぐめ

「泣くんじゃない」と。

「それが君の宿命だ。戦うため、皆を守るため、そのために作られたのだ」と。

「さあ、戦え。飛ぶんだ、どこまでも行つて、みんなを助ける」

ジャムおじさんは言つて、振り返つてはくれなかった。

そのまま、振り返ることなく最後に言った。

「しかし」と。

「勘違いするな」と。

「皆は、決してお前の友達なぞではない。いいか？お前は一人だ。

彼等は守られる側。そして、お前は守つて当然の側なのだ。お前は
そのために作られた。それは、忘れるな」

そういい残して、ジャムおじさんは厨房へ消えていった。
僕の代わりを作るために。

僕であつて、僕でない僕。
新しい顔。

今の僕が消えても、幾らでも“ソレ”の代わりは居た。

そうだ。と思う。

恐れるな、と。

皆のためなのだ。

彼等は守られる側、

そして、僕は守る側。

ジャムおじさんの言葉が頭の中で何度も右往左往する。
しかし、

ただ、と思う。

ただ、これだけは認めて欲しい。

“これだけは”、友達であると認めて欲しい。

“愛”と“勇気”だけは、ずっと、きつと、僕の友達であると。

「そう、僕はアンパンマン」呟いた。

君は優しいから。と誰かが言った。

だから戦うのか？

作られたからだろう？

それでも良い。

そのために作られたのなら、そのためにここに居るのだとしても、
それで良い。

僕は守ろう。僕が守ろう。彼等を、守ろう。

それが僕の宿命ならば、喜んで、皆の糧になろう。

時は早く過ぎる。

光る星は消える。

今まで助けてくれていた人達も、時が過ぎれば消えていった。

僕だけが、永遠に“ここ”に残り続ける。取り残される。

虚無と、夢と、正義と、悪と、力と。

同じことではないか？

いつかは消えるものだ。全て、同じことだ。

それならば、同じではないか？

早く消えようが、遅く消えようが、僕が守ろうが、守らなかつたが、同じことではないか？

いつか消え行くなら、

結局同じことなら、

僕を、縛らないで・・・。

君は、優しいから。

と、誰かが言った。

優しいから？

だから戦うのか？

ツクラレタカラダロウ——？

作られた、から・・・。

良しさ。僕は前に向く。

飛んで、行こう。

助けよう。

困っている人が助けを呼ぶなら、喜んで、僕はソレを救いに行こう。

壊れかけた夢があるなら、
崩れかけた希望があるなら、

僕は喜んで、その夢を、希望を掬ってやろう。
それが僕の宿命なら、僕はその糧になろう。

そうだ。と思う。

嬉しいんだ。と。

それが、生きる喜び。

助けることを喜ぼう。

それが生きがいなのだ、と、涙は拭って笑ってやろう。

そうさ、たとえ如何なる大きな敵が、前に立ちはだかろうと。

僕はそれすら超えてゆこう。

幾らでも、戦えるさ。

笑ってられるさ。

それが、生きがいとするならば――。

君は優しいから。

と、また声がする。

「僕は、アンパンマン」

と声に出して言ってみる。

そうだ。僕はアンパンマン。

皆を助けるために“生まれてきた”。

夢を掬うために、皆を救うために、悪を倒すために。

そのためにここに居る。

友達はいつでもそばに居る。

助けよう。友達を胸に。

だからどうか、

どうか僕を、

必要として――

そしていつか、
いつかきつと、

僕に、愛と勇気以外にも、
友達と呼べる誰かを――

だから今日も、僕は飛び続ける。
困っている人を助けるために。

「そう！僕はアンパンマン！みんなの“味方”さ！」

後 其為（後書き）

終了です。

何とか&a m p・#32363・ぎとしての役目を果たしてくれた
気がします。

何はともあれ、楽しんで頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0646b/>

アンパンマン ～ 真実の友 ～

2010年10月8日15時19分発行